寒い朝

北風が香草を静かに揺らす
はるか遠くの戦火は静かに灯る
それら静かな死は憎悪をなだめうるものか
既に行われた殺戮を清めうるものか……

誰もが無力を想っている
風に故郷はない、と誰かが言っていた
お前は涙を知っているのか
今やひとりで流されることのない涙

僕たちが声高にすぎるのか
それとも増幅する何ものかが在るのか
いずれにもせよ
僕たちは君に背を向けるべきではなかった

傍らで声がする
「くだくだ言わないで、
だって私にとって世界は
もう完成されたものなの
アイデンティティーなんて一体何の役に立つの？」

その「完成された世界」をどしどし歩き回り
同時にその世界の狭さに当り散らす君たちには
堪えられぬものもあるだろうな
誰だって密室でそれを聞かされつづければ———

目の前をゆっくりと歩き過ぎる猫の
肩の筋肉の動きと、遠い眼差し———
お前は寒くはないのかい、寒がりのくせに？
僕のふところで憩うがいい

寒いときはぬくもりの中で憩えばいい
僕はそのぬくもりを、この北風にもらったけれど
しかしどうだろうね、……ねえ
どうかしてこいつを降らすことができないものかな
憎悪の中に捨て置かれた者たちに、さ

(2001.10.8)